The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヴィシー政権下のフランス人民党 1940-1942年 (2)
Author(s)	竹岡, 敬温
Citation	大阪大学経済学. 2014, 64(2), p. 268-286
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57085
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヴィシー政権下のフランス人民党　1940 − 1942 年（2）

竹　岡　敬　温†

3. 親独反共

1941 年 4 月，ヴィクトル・バルテレミーと交した会話のなかで，ドリオは「われわれは，もっぱらフランスの利益になるように，行動を決めることにする。わたしはドイツの勝利を信じている」と語った。ドイツの勝利をドリオが信じたのは，かれが世界の諸国のせめぎ合うチェス盤の状況を検討した結果であった。けれども，「ヴィシーで，まったくの秘密裡に，その称号以上に，きわめて重要な地位を占めていた注目すべき人物」（ヴィクトル・バルテレミーの表現[113]）グルーサール大佐が，バルテレミーを介してドリオに伝えたメッセージにかれがもし従っていたならば，ドリオのその後の運命は大きく変わっていたであろう。グルーサール大佐は諜報問題の専門家で，陸軍士官学校の元指揮官であったが，戦前，カグール団やフランス人民党に共感を寄せ，その後もたびたびドリオにたいする好意をあきらかにしていた。かれは，1940 年夏，ペタン元帥から，国民革命の尖兵となるべき「護衛団」（その表現はナチスの“親衛隊〔SS〕”を翻訳したものだとヴィシーの政治家たちは気づいていた）を組織するという使命を負わされていたが，1941 年初め頃には，チャーチルと接触するためにロンドンに赴くという任務をペタンからあたえられた。

グルーサール大佐がヴィシーでヴィクトル・バルテレミーに会ったのは，同年 2 月にフランスに帰国したあとであり，かれは，イギリスは戦争に敗れることはなく，ドイツは結局，戦争には勝てないだろうというかれの確信をバルテレミーに語った。大佐は，ド・ゴールをイギリス政府の操り人形にすぎないといい，ドリオに，フランス人民党がしっかり根付いているアルジェリアに移動し，その地でフランス人民党を守り，戦争が終わったあと，同党がフランスから「同国を敗戦にいたらせたあらゆる腐敗」を取り除くようにすべきだという，たっての忠告をドリオに伝えてくれるようバルテレミーに頼んだ。ヴィシー政権はヴェガン将軍を北アフリカ管区指揮官に任命していたが，グルーサールの意見では，ヴェガンは，対独協力には反対であったが，元ボルシェヴィキの指導者にはそれほど敵意をもってはいないので，ドリオはかれと理解し合えるだろうということであった。しかし，ドリオは，グルーサールの説得を拒否した。ドリオは，ドイツが戦争に負けることはなく，もしフランスがあいまいな態度を取ったり，イギリス政府との関係を維持しつづけたりするならば，大きい犠牲を払うことになるだろうと考えていた[114]。

しかし，ドリオは，かれの考えがフランス国民の大多数の心底の感情とは正反対であることをよく知っていた。1940 年 12 月 15 日，フランス人民党のパリ地域の幹部を前にして，かれは「イギリスびいきが危険を引き起こしている。残念ながら，われわれの情宣活動は，1. イギリス嫌い，2. 元帥支持者というフランス国民の 20 パーセントにしか届いていないのが

† 大阪大学名誉教授

113) V. Barthélemy, *op.cit.*, p.187.

114) V. Barthélemy, *ibid.*, pp.188, 190, 216-222; J.-P. Brunet, *op.cit.*, pp.354-357; Ph. Burrin, *op.cit.*, pp.429-430.

事実である。われわれが結束させることができるのは，これらの人びとだけでしかない」と語っている[115]。その後も「フランス国民の過半数は，ありえないイギリスの勝利を期待している」ことを認め，「フランス国民の幻想の能力は比類がない」などと書いている[116]。

ドリオは，講和条約の調印——1940 年 6 月 22 日の休戦協定はドイツとの「戦争状態」を終わらせたのではなかった——によって，フランスはその敗北の代価を支払わなければならず，アルザスとロレーヌをドイツに割譲しなければならないであろうと信じ，1940 年 11 月末，パリ地域のフランス人民党幹部たちに，「われわれは，アルザスとロレーヌを諦めるべきであろう。しかし，わが国の植民地はけっして失ってはならない。もし誠実にドイツと協力するならば，われわれは，その大きな代償を手に入れることができるだろう」と釈明している。幹部たちはドリオの言葉をいつものように大げさに伝え，サン・ドニの党員たちに，「モントワール会談の非公式な結果は，アルザスとロレーヌのドイツへの併合である。しかし，フランスはその生活圏への権利，すなわち植民地拡大への権利を失わないので，戦争が終われば，イギリスの植民地，おそらくカナダを受け取ることになろう」と話した[117]。

ドリオの考えでは，「フランスがドイツとの戦争に負けたのは」，「私的資本主義にたいするたたかいにドイツ国民を駆り立てた革命的精神」と，それによって生み出された団結力と「恐ろしいほどの活力」のためであった。「今日，アングロサクソンの資本主義とのたたかいに身を投じているのは，これらの革命的な若い力である。それはたんにドイツとイギリス 2 国間のたたかいではない。それは対立している 2 つの文明のたたかいであり，異なる 2 つの文明を象徴する 2 つの大陸のたたかい」であった。このような状況のなかで，日和見主義は最悪の選択であり，フランスのなすべきことは，「みずからの運命をユダヤ・アメリカ・イギリス的金権政治の運命に結びつけ」，「ヨーロッパにおけるアメリカの橋頭堡となる」か，それとも「新しい秩序に向かう」かという両極端の二者択一でしかなく，そして，問題をこのように設定し，それに答えようとすることは，とりわけメル・セル・ケビル事件以来，「われわれがイギリスと交戦状態にはいるべきであり」，「操り人形のド・ゴールがわれわれから奪ったわが国の植民地の一部を取り返さなければならない」とつよく主張することであった。

「自由フランス」の指導者ド・ゴールにたいしてドリオがこのように手厳しく，かれのことを何度も「裏切り者」とか「操り人形」とか呼んだ——ドリオによれば，ド・ゴールは「休戦協定後に，ドイツが戦闘で殺したよりも多くのフランス人を殺した裏切り者」であった——のは，ド・ゴールがかれの運命を先祖代々の宿敵イギリス——ルーアンでのジャンヌ・ダルクの火刑，南アフリカ北西沖のイギリス領の火山島セント・ヘレナ島へのナポレオンの流刑，英仏の植民地獲得競争の頂点となったファッショダ事件（1898 年）等，多くの歴史的事件の思い出が英仏を対立させていた——と共にしたからであったろう。もちろん，1939 年に始まった戦争が「革命的な大陸」と「反動的な大陸」と

---

115) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, dossier《PPF, rapports de réunions》, rapport du 15 décembre 1940.

116) J. Doriot, *Réalités, op. cit.*, p.66.

117) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 332, dossier《PPF, rapports de réunions》, pièce《24 novembre 1940. Réunion des cadres de la Région parisienne du PPF tenue le 23》et rapport du 7 décembre 1940. マルセル・デアも同様な分析をしていて，1940 年 12 月 26 日の日記のなかで，「すでにフランス政府に提示されている講和条件——すなわち，アルザス・ロレーヌの併合のみ，占領費以外の戦争賠償金なし，ヨーロッパ間協力の範囲での経済的合意，アフリカの植民地の保証——が」12 月 13 日までに「公表されることが望ましかったが，あの馬鹿なやつら〔ラヴァル解任の件である〕がすべてを台なしにしてしまった」と書いている。*Journal de Marcel Déat*, 26 avril 1941.

のたたかいであるとみなしてドリオがとった選択は，いかにも単純であった。しかしながら，かれのいう「革命的な大陸」が——とりわけ独ソ不可侵条約によって——ソ連の悪魔と利害をともにしているという事実が原因での一種の自制心からであったろう，ドリオは，ドイツの勝利を公然と願うことは避け，曲言法を使って，「わたしはイギリスやアメリカの金権政治の勝利を望まない」というにとどまったのである[118]。

それにしても，なにがドリオをこのような眩惑（それはデアの脳裏にも渦巻いていた思いであった）のなかに引きずり込んだのであろうか。それは疑うことを知らない情熱，疑念を受けつけない確信，そして，時間稼ぎの解決策や中間的な立場の拒否，とりわけ，ドイツ帝国の最終的勝利への信念が動揺することの本能的拒否であったろう。ドリオは，1939年に始まった戦争が世界的規模の戦争に拡大することを完全に自覚していたが，日本やアメリカなどまだ戦争に加わっていない国ぐにの参戦を考えに入れたとしても——この土台のしっかりしていない見かけ倒しの大国アメリカが戦争に介入してくるかどうかは，まったくたしかではないが，たとえ介入してきたとしても，おそらく遅きに失するであろうとドリオは考えていた——，ドイツは戦争に負けることはないという絶対的な確信を抱いていた。その後の事態の展開を知っているわれわれには，かれが思い違いをしたことがわかっている。しかし，もし日本が1941年12月8日にハワイの真珠湾を攻撃してアメリカ合衆国に宣戦布告したりしないで，その領土拡大の力を中国大陸に集中していたならば，そして，もしヒトラーが1941年6月にソ連を侵略しようとはせず，独ソ戦が起こらなかったとするならば——そのような想像がもし許されるならば——，その後の事態の進展はまったく違ったものになっていたであろう。そのときには，ドイツ帝国は数十年間は続いていたかもしれず，ドリオは，誤った分析にもとづきながらも，「正しい」結論にたどりついていたかもしれない。

しかし，対独協力にかんしては，ドリオの姿勢は，なお，ためらいと慎重さを示していた。ペタンとの関係を維持しようという配慮もその理由であったろうが，根本的な理由はソ連にたいするドイツの態度であった。ドリオの対独協力は，かれが「自然に反する」と判断していた独ソ不可侵条約が破棄されたのちにしか進展しなかった。しかし，この点については，ドリオは，ヒトラーが，西部戦線で勝利した翌日には，すぐさま寝返って，スターリンに敵対するであろうと確信し，希望をもちつづけていたのである[119]。

さしあたって，ドリオはヴィシー政府を対独協力の方向へ押し進めようとした。かれは，フランス国民の大多数にとって敗戦後の混乱した世界で唯一の拠りどころとおもわれたペタン元帥に忠実にとどまることを明言し，1941年6月22日，リヨンで開かれた自由地区のフランス人民党大会での演説の最後には，「わたしはペタンをわが父とみなしている。わたしよりも思慮深く，思いやりのある父として尊敬している・・・元帥はわれわれを悪夢から救い出された。元帥はわれわれをヨーロッパ間協力の軌道に乗せられた。わたしが元帥の部下でも兵卒でもないなどと，どうして望むことができようか」と叫んだ[120]。そして，「国民の大多数から崇拝されたフランスの国家主席」にたいする尊敬と愛着を声高に叫ぶ一方で，ドリオとかれの仲間たちは，1941年夏以降，ペタンに背き，かれの政策をゆがめる取り巻きたちを激しく攻撃したのであった。

こうして，パリ地域のフランス人民党幹部マ

[118] J. Doriot, *Réalités, op. cit.*, pp. 54, 57-59, 61, 63, 65, 67, 101-102, 105-106.

[119] V. Barthélemy, *op.cit.*, p. 221.

[120] J. Doriot, *L'agonie du communisme, op. cit.*, pp. 14-15.

チュラン・ボロレは，公開の集会で，ペタンの取り巻きたちが「対独協力にはっきりと反対の態度を示し，ド・ゴール支持者でもある」と批判した。また，マルセル・マルシャルは，成り行き次第で，対独協力主義者になったり日和見主義者になったりイギリスびいきになったりするヴィシー政府のあいまいな政策を告発し[121]，ヒトラーの明敏さと決断力を称賛し，「明日のヨーロッパの指導者となるのがかれであるのは，幸運である。というのは，ヴィシーには，数人の閣僚たちの助けを借り受けたかなりの数の軍人の一味がいて，かれらは，昔ながらの方式に従って，リターンマッチを準備するために，和平条約の即時調印を望んでいるからである」との見解を表明した[122]。国内政策の分野では，多数の集会でフランス人民党の演説家たちは，ヴィシー政府が反動と革命を取り違えていると強調し，1941 年 7 月 6 日のヴァーグラム会館の集会では，占領地区の党組織責任者アラン・ジャンヴィエは，ペタン元帥の取り巻き連中が，かれらの特権にしがみつき，国民革命を棚上げにしようとしていて，「元帥の寛大な意見を妨害するためなら，なんでもしようとしているようだ」と怒りの声をあげている[123]。

1941 年 10 月 4 日には，ヴィシー政府は，1884 年 3 月 21 日の労働組合法によって認められた「組合の自由」――組合結成の自由（労働組合の国家からの独立），個人の加入・不加入の自由，組合複数主義――を否定し，産業部門別に社会委員会を設立する「職業の社会的組織」にかんする法律――「労働憲章[124]」と呼ばれた――を公布したが，それにたいしてフランス人民党は激しく反対した。アルベール・ブーグラ（フランス人民党リヨン地域総代表，同党全国同業組合書記）は，サン・ドニ地区のフランス人民党員を前にして，同法が雇い主の利益を制限せず，企業経営に労働者を参加させようとしないことを非難し，ペタン元帥が，1941 年 3 月 1 日のサン・テチエンヌでの演説のなかで，明確にしていた社会政策がかれの協力者たちによって骨抜きにされたことに不満をのべ，「資本主義に立ち向かえるのは，労働戦線だけです。それはドイツで起こったことであり，ドイツでは労働戦線が資本に打ち勝ったのです」とつけ加えた[125]。また，パリのマジック・シティー会館での集会その他多くの公開集会で，フランス人民党の演説家たちは，行政機関や警察の職員の 4 分の 3 がド・ゴール支持者で，ペタン元帥の政策を計画的に破壊しようとしているなどとのべて，ヴィシー政府を厳しく批判したのであった[126]。

ドリオもまた，党の機関紙上で，ヴィシー政府のめざさなければならない国民革命の諸改革がいかにあるべきか，その大綱を示し，労働者

---

[121] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport du 17 septembre 1941.

[122] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport du 20 octobre 1941.

[123] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport du 7 juillet 1941 (meeting de la salle Wagram).

[124]「労働憲章」については，Hoover Institute (Stanford University), *La vie de la France sous l'occupation (1940-1944)*, Plon, Paris, 1957, vols 3, tome I, pp. 163-185; Georges Lefranc, *Les expériences syndicales en France de 1939 à 1950*, Editions Montaigne, Paris, 1950, pp. 54-61; Michèle Cointet , *Nouvelle histoire de Vichy (1940-1945)*, Arthème Fayard, 2011, pp. 337-345; Jean- Pierre Le Crom, *Syndicats, nous voila! Vichy et le corporatisme*, Editions de l'Atelier, Paris, 1995, pp. 121-144; Jacques Julliard, La Charte du travail, in Fondation nationale des Sciences politiques, *Le Gouvernement de Vichy, 1940-1942* (Actes du colloque des 6 et 7 mars 1970), Armand Colin, Paris, pp. 157-194; Michel Margairaz, *L'Etat, les finances et l'économie. Histoire d'une conversion, 1932-1952*, Comité pour l'Histoire économique et financière de la France, Ministère de l'Economie et du Budget, I. pp. 564-570. 邦語文献としては，田端博邦「ヴィシー体制下の産業・労働統制―“労働憲章”を中心に―」東京大学社会科学研究所編『ファシズム期の国家と社会 5　ヨーロッパの法体制』東京大学出版会，1979 年，pp. 191-234; 渡辺前掲書, pp. 105, 260-261 などを参照のこと。

[125] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport du 23 novembre 1941.

[126] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapports des 12 et 13 septembre 1941, 15 février 1942.

の賃金の引き上げ，食糧・物資補給の改善など，労働者の生活改善を訴えた[127]。1941年10月にフランス人民党がドイツ占領軍当局によって公式に承認されると，同党は，病院，無料診療所，サナトリアム，保育園，図書館，プール，グラウンド，老人・児童・女性・未婚の母への援助等の整備など，思いつくものすべてを並べたてたような，途方もないプログラム[128]を策定した。これにたいして，ヴィシー政府のほうはドリオとフランス人民党を警戒し，その総合情報室の1941年6月4日付の報告は，「フランス人民党は，もはや元帥に信頼される集団ではないとおもわれる」と結論し[129]，また，1941年7月18日にヴィシー政府の内相になったピエール・ピュシューは，ドリオに敵意をもちつづけ，就任するやただちにフランス人民党の活動を妨害しようとし，南部地区では同党の活動を禁止したのであった。

1941年6月22日，日曜，午前7時，リヨンで開催される自由地区のフランス人民党大会に出席するために，リヨンのホテルに泊っていたドリオとフランス人民党の政治局員たちは，「ドイツ国防軍がソ連に進攻したぞ！」というモーリス・イヴァン・シキャールの叫び声でたたき起こされた。たちどころに，党の全首脳部が，パジャマや部屋着姿のまま，ドリオの部屋に集合し，ドイツ国民にたいしてヒトラーが呼びかける中継放送に聞き入った。

ヴィクトル・バルテレミーによれば，独ソ開戦のニュースは，フランス人民党の幹部たちのあいだに，名状しがたい感動を引き起こした。ドリオは，仲間たちに，つぎのように語った。「この瞬間は，世界全体にとって，また，われわれ，わが同志，わが党にとっても，もっとも偉大で歴史的に重要な瞬間だ。いまや，この戦争はわれわれの戦争である。それは，5年まえのちょうどいまごろ，サン・ドニでわれわれが始めたたたかいの論理的帰結である。この戦争，われわれの戦争を勝利する日まで最後まで戦おう。」ドリオは目に一杯涙を浮かべていた。そして，ヴィクトル・バルテレミーは，そのときの情景をつぎのように解説している。「独ソ条約の重い障害が，ついに取り除かれたことが分かった。ドリオがあれほど奉仕し，あれほど信じてきた共産主義，かれにとってはきわめて深い失望であり，きわめて激しい苦悩であった共産主義は，ついにドイツという無敵の強国によってのどもとをつかまえられたのである[130]。」ドリオとその仲間たちは，共産主義によってひどく裏切られてきたのであったが，ソ連がドイツの敵国になったいま，かれらが長年その人生を捧げてきた理想は，いまや，かれらにとっては，新しい帝国主義としての正体を暴露したのであった。

ドリオは，1941年6月22日を，「嵐の一夜のあと，夜明けを迎えた船乗りのように[131]」，大きな解放感と歓喜の気持で迎えた。同日午後，ドリオは，リヨンでの南部地区のフランス人民党大会参加者を前にして，このドイツの対ソ宣戦布告という，世界的な大戦に起こったばかりの驚くべき変化について，つぎように解説した。「わたし自身の意見として，また，わが党を代表していうのでもありますが，わたしにとって共鳴できる戦争があるとすれば，それはまちがいなくこの戦争であると明言します・・・今日始まった戦争をみるとき，たぶん，その戦争の結果，数か月あるいは数年のうちに，善良なフランス国民は自国内で争いをし

[127] J. Doriot, *Réalités, op. cit*., pp.107-108.

[128] *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, le dossier Fossati,《Rapport sur le PPF》（フランス解放時に総合情報室によって作成された報告）, pp.10-16.

[129] *Archives Nationales*, F^{7} 15588, Dossier《Partis et groupements politiques》, Rapport cité supra, pp.63-64.

[130] V. Barthélemy, *op.cit*., pp.235-236; J.-P. Brunet, *op.cit*., p.359sq.

[131] J. Doriot,《Ecrason l'infâme》, *Le Cri du Peuple*, 27 juin 1941.

ないでいることができるでしょう[132]。」もちろん，ドリオのいうのとは違った意味でも，フランスの世論一般にとっては，独ソ２つの大国——2つのギャング集団——がフランスから遠く離れた地で争い，かれらの力を消耗しあうのは，望ましいことであったろう。

同時に，ドリオは，対独協力の必要性を強調したいためであったろう，現実を歪曲してまで，対独協力政策の結果を過度に称賛しようとして，その数日後の７月６日，パリのヴァーグラム会館での演説で，つぎのように主張している。「ドイツは，われわれにたいして全面的な勝利を勝ち取ったあとも，われわれになにも要求せず，われわれにその植民地のすべてを残し，われわれに手を差し伸べて，相互の協力を提案しています。そのうえ，ドイツはわが国がその植民地を防衛し管理する権限をわれわれに残してくれています。1914 − 1918 年の戦争の兵士であったヒトラー総統は，この大戦で戦ったフランスの兵士たちを——おそらくかれが戦場で対峙しあった兵士たちを——釈放するよう命令しました。それにもかかわらず，なお，このように寛大な感情を否定し，両国の協力を拒否するような，愚か者や罪深い者たちがはたしているでしょうか。」こうして，ドリオは，休戦協定の結果，フランスが占領地区と自由地区に分けられることになった境界線の規制緩和と，ドイツ軍政司令部の管轄下に置かれた北フランスのノール県とパ・ド・カレー県の一部返還の要求をほのめかし，今後，フランスは２つの敵，ソ連とイギリスと戦わなければならないとのべて，演説を締めくくっている[133]。

ドリオは，講和条約締結のための仏独交渉の結果を知らなかったのであろうか。

1941 年２月９日，フランダンの後を継いで，ダルラン提督がヴィシー政府の副首相に任命され（すでに海軍大臣であったダルランは，副首相と外相の地位を占め，さらに２月 10 日には情報相，２月 17 日には内相，８月 11 日には国防相をも兼任し，しかも，無傷のまま残され，フランスにとって最後の重要な軍事資源であったフランス海軍のおかげもあって，ヴィシー政権の中心人物として，他の誰よりも休戦協定の命運を握る人物とおもわれていた），仏独関係を担当する外務省の政務次官には，ドリオと親しいジャック・ブノワ・メシャンがダルランによって任命されていた。したがって，ドリオは，このブノワ・メシャンによって仏独交渉についての確かな情報を知らされていたはずである。ブノワ・メシャンは，ダルランとともに仏独間の長い交渉に参加し，５月 28 日には，パリで，北アフリカと西アフリカのフランス植民地におけるドイツの基地使用権についての重要な協定，「パリ議定書」の調印にも立ち会った。

仏独交渉のあいだ，ヒトラーはすこしも一方的な譲歩をするつもりはなく，５月 11 日，ダルランがベルヒテスガーデンに赴いてヒトラーと会見したとき，ヒトラーは，ダルランが政権について以来繰り返しおこなってきた仏独関係についてのさまざまな新しい提案にたいして，ドイツとフランスとのあいだでは，政治的協力などは論外であることをダルランに理解させた。しばらく後の７月１日，ドイツ外相リッベントロープは，アベッツ大使に，もしフランスがイギリスに宣戦布告するならば，イギリスはフランスの海岸沿いに厳しい封鎖を実施し，そうなれば北アフリカのフランス本土からの離脱を引き起こすおそれがあろうから，フランスの対英宣戦布告は絶対に避けなければならないと強調した。

パリ議定書では，ドイツが占領費の小規模な削減，占領地区と自由地区の境界線の通行制限の緩和，ドイツの捕虜収容所にいる第１次世界大戦の元兵士たちの釈放（８万人足らず），若干数のフランス軍施設の軍備改善を受け入れた

---

[132] J. Doriot, *L'agonie du communisme, op. cit.*, p. 6.

[133] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport du 7 juillet 1941.

のにたいして，フランスのほうは，ドイツにたいして，イラクにおける反英反乱を助けるためのシリアの飛行場の使用，ロンメルのアフリカ軍団のための軍需物資補給ルートとしてのチュニジアのビゼルト港の使用，寄港地として，場合によっては潜水艦基地としての，ダカールの使用を認めている。しかし，両国交渉の最後には，アベッツは，ヒトラーが講和条約の締結を遠い将来に延期しようとしていること，講和条約では，ドイツはイタリアとスペインの要求を全面的に支持するであろうこと，また，ドイツの領土要求は戦争終結以前には明確にされないであろうことを隠さなかった[134]。

したがって，ドリオが，その演説のなかで，鷹揚で寛大なヒトラーの肖像を描き，フランスがためらうことなくかれに協力すべきであると主張したのは，まちがっていたし，聴衆をだましていたことにもなろう。やがて，ドリオは，国家主義的であると同時に真に社会主義的なドイツ，大ヨーロッパ連邦の母胎ドイツ，ソ連共産主義の悪にたいして善の力を体現したドイツという，神話的なドイツのヴィジョンを捏造し完成させていくのである。イデオロギー的，情動的な想定によって現実を歪曲した，このような善悪二元論のなかで，ドリオは，ヒトラーの化けの皮をはがすことができず，かつてのボルシェヴィキ共産主義者時代と同様の誤まりのなかに，ふたたび落ち込んでいくのである[135]。

4. 反ボルシェヴィズム・フランス義勇軍団

1941 年 6 月 23 日の『人民の叫び』紙は，第 1 面に，「ドイツは，モスクワにたいするヨーロッパ防衛を引き受けつつある。ジャック・ドリオは正しかった。かれは，1936 年にすでに，モスクワの二枚舌を告発した」との見出しを掲げた。その前日の 6 月 22 日，ドリオは，リヨンでのフランス人民党大会の参加者たちに，ペタンに宛てて，ドイツ国防軍とともにソ連共産主義と戦いにいく，フランス義勇軍団の創設を許可するよう要求した電報を送るという決議を採択させた[136]。6月28日，マルセイユでの集会のとき，ドリオは，かれがこの計画に身を投じ，みずから義勇軍団に加わって東部戦線で戦う意図をあきらかにしたが，しかし，政治局メンバーから県書記のレヴェルまでの党幹部たちには，かれの例に倣うことを厳しく禁じた。

けれども，義勇軍団の結成を考えたのは，ドリオだけではなかった。とりわけデアの国家人民連合も，この計画にきわめて好意的な態度をみせていたアベッツ大使と接触し，ペタン元帥の許可を願い出た。ペタンの認可は 7 月 4 日にえられた。

しかしながら，ヴィシー政府は，ドイツからの公式的要請がないかぎり，必要な物質的援助をあたえることは拒否するとし[137]，ダルランは，「ドイツ政府と軍の最高司令官が，あらかじめ，反共産主義の戦いへのわれわれの参加のシンボルとなる義勇軍団を承認し，ボルシェヴィズムと戦う部隊のなかにフランスの代表を加えたいという願望を公式に表明しないかぎり，フランス政府はこれ以上先にはいかない，すなわち，義勇軍団の兵士募集と同軍団の維持を物質的に援助することはできない[138]」と答えた。そして，休戦後帰休中のフランス軍士官には，義勇軍団に参加することを禁止した[139]。

こうして，義勇軍団にたいするフランス政府の物質的援助のえられないことが判明したが，

---

134) Eberhard Jäckel, *La France dans l'Europe de Hitler*, Arthème Fayard, Paris, 1968, chapitre X, pp. 235, 241, 249; R. O. Paxton, *op. cit.*, (traduction française) *op. cit.*, pp. 149-158, 渡辺・剣持訳, pp. 121-129.

135) J.-P. Brunet, *op.cit.*, p. 362.

136) Ph. Burrin, *op. cit.*, p. 430; J.-P. Brunet, *op.cit.*, p. 362.

137) Pierre Giolitto, *Volontaires français sous l'uniforme allemand*, Académique Perrin, Paris, 2007, p. 16.

138) Cit. par Pierre Bourget, *Histoires secrètes de l'occupation de Paris*, I *Le joug*, Hachette, Paris, 1970, p. 298.

139) Jacques Delarue, *Trafics et crimes sous l'Occupation*, Arthème Fayard, Paris, 1968, p. 162.

さらに，他方で，対独協力派の諸組織は，ドイツ側の承認を必要としていた。決定権はヒトラーの手中にあったが，ヒトラーはフランス軍の再生に貢献するようなフランス義勇軍団が結成され，ロシア戦線におけるドイツ軍の予備部隊になるなどということは望んではいなかった。1941 年夏には，義勇軍団の結成を歓迎するようないかなる政治的，軍事的実必要も存在してはいなかった[140]。

しかし，ドイツ大使アベッツは，この計画を知った 6 月 23 日以降，義勇軍団創設の考えを支持しようと決心し，その計画をヒトラーに好意的に説明した[141]。最初，ヒトラーは同意することをためらい，ドイツ国防軍参謀本部もかれと同意見であった[142]が，しかしながら，結局，ヒトラーは，7 月 1 日，フランス義勇軍団の志願兵の募集を認可し，かれの承認は 7 月 5 日にパリのドイツ大使館に正式に伝えられた[143]。ヒトラーの決定は政治的であった。ヒトラーがフランス義勇軍団を承認したのは，ドイツの旧敵フランスがソ連にたいする戦いに参加することは，ドイツの国旗の下で共産主義と戦っているのが全ヨーロッパであることを証明するための，プロパガンダの目的に利用できると考えたからであったろう。

ヒトラーの承認に力をえたアベッツは，7 月 6 日，フランス義勇軍団の結成条件を知らせるために，リール街（パリ 7 区）のかれの事務所に，デア（国家人民連合），ドリオ（フランス人民党），コスタンティーニ[144]（フランス同盟），クレマンティ[145]（国家共産党），ビュキャール（フランシスト）らの関係党首を集めた[146]。

結成条件は 2 つあった。義勇軍団はあくまでヴィシー政府からは独立した私的性格の組織としてとどまるべきであり，志願兵の数は 1 万 5,000 人を越えるべきではないというものであった[147]。さらに，受け入れるのは占領地区の志願兵だけであるという補足条件があった[148]。これらの条件を設けることによって，ドイツ軍政司令部は，フランス義勇軍団内にドイツ軍の最高司令官を置き，ヴィシー政権が義勇軍団の部隊にたいしてすこしの影響力ももたないようにすることができたのである[149]。また，兵員数を制限した理由のひとつは，ヒトラーが，対ソ戦へのフランスの参加が象徴的なものにとどま

140) Barbara Lambauer, *Otto Abetz et les Français ou l'envers de la collaboration*, Arthème Fayard, Paris, 2001, pp. 401-402,

141) Saint- Paulien, *op.cit*., p. 240.

142) Philippe Aziz, *Les dossiers noirs de l'Occupation*, 4 vols., Famot, Genève, 1979, Ⅱ, p. 195.

143) B. Lambauer, *op.cit*., pp. 401-402.

144) ピエール・コスタンティーニ。1889 年にコルシカのサルテーヌに生まれ，第 1 次世界大戦には空軍士官として参加，傷痍軍人となったにもかかわらず，第 2 次世界大戦に召集され，クーロミエの空軍基地を指揮し，イギリス空軍のメル・セル・ケビル空爆後，イギリスにたいして宣戦布告したポスターをパリの街の壁に貼りつけた。1940 年 9 月 15 日，ドイツ大使館の同意をえて，「粛清，社会的相互扶助，ヨーロッパ間協力のためのフランス同盟」を結成したが，短命に終わったあと，ドイツ大使館の意志によって，フランス義勇軍団の創立者のひとりとなった。

145) ピエール・クレマンティ。コルシカ出身のジャーナリストで政治活動家。1933 年に，急進党系日刊紙『共和国』のスポーツ記者となった。1934 年 2 月 6 日の極右諸同盟の暴動事件直後に，フランス国家共産党を結成し，1936 年に機関紙『自由の国』を発刊，反ユダヤ主義，反資本主義，反マルクス主義のイデオロギーを広めた。かれは，1940 年夏に，パリで，ドイツ大使オットー・アベッツと接触した最初の対独協力組織の指導者であり，1941 年 7 月には，かれの組織の貧弱さにもかかわらず，フランス義勇軍団（LVF）の創立者のひとりとなった。フランス義勇軍団（LVF）結成時のコミュニケには，「国家集産主義党党首」と署名した。1942 年には義勇軍団の軍事作戦に参加したが，1943 年に傷病兵としてフランスに送還された。

146) *Bundesarchiv- Militärarchiv, N 756/201. 8. Französische SS-Freiwilligen Sturm-Brigade*, p. 1; J.-P. Brunet, *op.cit*., p. 363; Krisztián Bene, *La collaboration militaire française dans la Seconde Guerre mondiale*, Edition Codex, Paris, 2012, p. 55.

147) Ph. Burrin, *op. cit*., p. 472.

148) 当時フランスで生活していた白系ロシヤ移民の多数がソ連との戦いに参加するのを望んだが，かれらも募集から排除された。

149) Institut d'Histoire du Temps Présent, *Soldats français sous uniformes allemands, 1941-1945*, Comité d'histoire de la Seconde Guerre mondiale, p. 3.

るよう主張し，フランスの兵士が名誉の分け前にあずかるのをみたいとはおもわなかったからであろう[150]。

出席者全員が一致してドイツ側の条件を受け入れ，7月8日の新聞とラジオで，つぎのようなコミュニケが発表された。「フランスの国家主席ペタン元帥の承認とヒトラー総統の同意をえて，下記に署名したフランスの諸団体は，全面的な合意のうえで，ボルシェヴィズムと戦う十字軍に参加することを決定した。これらの団体は，ただちに，ロシア戦線でフランスを代表するために，フランス義勇軍団を設立し，その名において，ヨーロッパ文明擁護のための戦いに参加する[151]。」

こうして，反ボルシェヴィズム・フランス義勇軍団（Légion des volontaires français contre le bolchevisme, LVF）が結成されることになった[152]。義勇軍団の創設者たちは中央委員会をつくり，その初代総裁にはドロンクルがなり，ドロンクルは4か月間このポストを占めた。ついで各団体のリーダーが，2か月ごとに交代して，このポストについた。署名各団体の本部と，元ソ連旅行代理店イントゥーリストの建物（パリ9区オーベール街12番地）に置かれた，新しい組織の中央事務所に，さらに，それだけにとどまらず，ドロンクルの指示によって徴発された元ユダヤ人所有の60ばかりの店に，募集センターが開設された。志願兵の募集が禁止されていた非占領地区にも，シモン・サビアーニの指揮下，行動委員会が設置された[153]。ヴィクトル・バルテレミーによれば，これらの募集センターには，とりわけフランス人民党本部（パリ10区ピラミッド街10番地）の募集センターには，志願者が殺到したという[154]。しかし，まったく違った別の証言もあり，それによれば，募集キャンペーンは多くの人びとの無関心と反感に遭い，いくつかの募集センターには投石さえあったという[155]。

ドイツ大使館参事官のユリウス・フォン・ヴェストリックがアベッツの代理として出席した，フランス義勇軍団（LVF）中央委員会の第1回会合（1941年7月24日）では，若干の参加者（そのなかには，フランス人民党を代表して，ヴィクトル・バルテレミーとジャン・フォサーティがいたようである）が，志願兵ひとりにつき，ドイツが2人のフランス軍戦争捕虜を釈放するよう要求したが，しかし，これにたいして，ドイツ側からはいかなる正式の約束もなかった[156]。1941年秋には，フランス人民党戦争捕虜センターは，「義勇軍団の兵士ひとりが犠牲になるたびに，数千人のわれわれの同胞捕虜が釈放される」というポスターを貼り出した[157]が，それはたんなる願望にすぎなかった。フランス義勇軍団（LVF）の結成とそれへの参加は，せいぜい講和条約調印のさいにドイツ側に感謝されると期待することを可能にしただけであったのか，あるいは，戦争の勝者ドイツがそのヨーロッパ支配を確立するのを手伝うことによって，フランスの奴隷化に役立つ（ジャック・ドラリュー[158]）だけであったのか，いずれにせよ，それは，ソ連共産主義にたいする憎悪に突き動かされた，いわば一種の無償の行為であった。すくなくとも，志願兵の一部については，そのようにいうことができたであろう[159]。

ドリオについていえば，かれは，フランス義勇軍団（LVF）を本格的な軍隊にするために，

---

150) P. Giolitto, *op.cit*., pp. 47-48.
151) *Le Cri du Peuple*, 8 juillet 1941.
152) 反ボルシェヴィズム・フランス義勇軍団（LVF）について論じた邦語文献としては，長谷川公昭『ナチ占領下のパリ』草思社, 1986年, pp. 130-152がある。
153) P. Bourget, *op.cit*., I, p. 300; *Le Cri du Peuple*, 18 juillet, 1941; K. Bene, *op.cit*., p. 57.
154) V. Barthélemy, *op.cit*., pp. 239-240.
155) Ph. Aziz, *op. cit*., Ⅱ, pp. 197-198.
156) Saint- Paulien, *op.cit*., pp. 309-310; D. Wolf, *op.cit*., p. 351, 平瀬・吉田訳, p. 348; J.-P. Brunet, *op.cit*., p. 363.
157) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 340, pièce du 2 décembre 1941.
158) J. Delarue, *op.cit*., chapitre《Ce que fut la LVF》, p. 161.
159) J.-P. Brunet, *op.cit*., p. 363.

できるかぎりの努力をしたといえよう。また，かれがみずから義勇軍団に参加し，ロシアに戦いにいくことを決心したのは，勝利を収めるであろう戦争，おそらく短期間で終わるであろう戦争にフランスが参加して，ドイツが東方に「生存圏」を獲得したのちには，フランス国民がこのドイツの東方征服に貢献しただけ，講和条約でドイツはフランスにたいして手心を加えるであろうという，政治的計算があったためでもあろうが，しかし，その計算はかれの個人的復讐の意志と分かちがたくまざり合っていたであろう。

けれども，フランス義勇軍団（LVF）の結成事業は，ドリオの期待通りにかんたんにはいかなかった。フランス義勇軍団（LVF）の結成には，アベッツを別にして，ヴィシー政権はもちろん，ドイツ政府，とりわけドイツ国防軍参謀本部も，あまり熱意を示さず，アベッツが3万人の志願兵の募集を提案したのにたいして，ヒトラーもペタンも，ともに，フランス義勇軍団（LVF）が反ロシア戦役へのフランスのもっぱら象徴的な貢献にとどまるように配慮し，その兵員数がそれほど増加するのを望まなかった。休戦で帰休中のフランス軍士官は，義勇軍団に加わるのを許可されなかった[160]。ドイツ政府は，最初から，兵員数を1万から1万5,000に制限し[161]，また，1941年7月6日にパリの冬季競輪場で予定されていた志願兵募集キャンペーンの大集会を中止させた。冬季競輪場での集会は，結局，7月18日におこなわれた[162]。

この集会に先立つ1週間まえの1941年7月10日，ドイツ大使アベッツは，フランス義勇軍団（LVF）中央委員会のメンバーである各団体の指導者たちをマキシムでの昼食会に招いた。この会合の目的は，フランス義勇軍団（LVF）の志願兵募集を促進するため，宣伝活動の分野における協力方法を決めることであった[163]。こうして，宣伝のための一大キャンペーンが開始され，パリの街の壁という壁は，つぎのような，1939年の開戦時の総動員の呼びかけを想起させるようなアピールとポスターで覆われた。「フランス国民よ！戦争と世界の崩壊に責任があるのは，ボルシェヴィズムである。ボルシェヴィズムを壊滅させるために立ち上がろう。モスクワと戦うドイツ軍に味方して，フランス義勇軍団（LVF）に参加したまえ。あなた方は，世界の全労働者解放のための十字軍に参加するのである。あなた方は，西洋文明擁護のために努力を傾注するのである。あなた方は，あなた方の祖国の名誉のために，フランス軍の武器をもち，フランス軍の制服を着て，フランス国旗のはためくもとで戦うのである！ペタン万歳！モスクワ政府を打倒せよ！[164]」新聞やラジオは，義勇軍団の兵士をボルシェヴィズムの危険にたいする西洋文明の擁護者として紹介した[165]。

メディアの強力な宣伝活動を補完するために，占領地区では多くの集会が組織された。それらのうちもっとも重要であったのは，1941年7月18日，フランス義勇軍団（LVF）中央委員会によって準備されたパリの冬季競輪場での公開集会である。既述のように，この集会は最初7月6日に予定されていたが，ドイツ国防軍参謀本部の要請によって，結局，12日間延期されたのであった。しかし，対独協力派の新聞が大勢の出席者を予想していたにもかかわらず，冬季競輪場が満員になるにはほど遠かった。警察報告によれば，出席者数はおよ

[160] ある若い飛行士が休戦で帰休中の兵士のなかからフランス義勇軍団（LVF）のための志願兵を募集しようとしたが，逮捕され，軍人離叛と脱走教唆の罪で懲役18か月の判決を受けた。J. Delarue, *op.cit*., p.162.

[161] Ritter à Abetz, 14 juillet 1941, no. 662, *Büro des St. S. Frankreich/5*; D. Wolf, *op.cit*., p.350, 平瀬・吉田訳, p.348; Ph. Burrin, *op. cit*., p.431; J.-P. Brunet, *op.cit*., p.365.

[162] B. Lambauer, *op.cit*., p.407.

[163] J. Delarue, *op.cit*., pp.156-157.

[164] *Archives Nationales*, F 60 235, Etude sur la LVF, pp.6-7.

[165] *Archives Nationales*, F 60 235, Etude sur la LVF, p.7.

そ8,000人であり，そのうちの4分の1は女性で，1,000人から2,000人は各団体の警備のメンバーであった。びらやポスターによる盛大な宣伝やパリの諸新聞の反復的な宣伝の割には，出席者は多くはなかった[166]。冬季競輪場の客席を出席者で満たすことができなかったのは，義勇軍団にたいするパリ市民たちの敵意を示すものであったろう。

この集会では，コスタンティーニ，クレマンティ，デア，ドリオ，ドロンクルなど，フランス義勇軍団（LVF）に参加する諸団体の主要リーダーたちが演説した[167]が，ドリオは，「ボルシェヴィズムが社会主義でなく，もっとも悲惨でもっとも恥ずべき労働者搾取であることを知らない共産党の労働者たち，ボルシェヴィズムが自分たちの財産，住まい，家族を破壊してしまうことを知らないプティ・ブルジョワたち，ボルシェヴィズムが信仰と信念の破壊であることを知らない宗教信者たち」など，スターリンの勝利を願う無自覚なフランス人を厳しく告発したあと，かれはつぎのように語った。「もしフランスがヨーロッパにふさわしい国としてとどまりたいなら」，フランスはヨーロッパとともにボルシェヴィズムと戦わなければならない，「この共同の戦いから，ヨーロッパの再建をつかさどるべき共同の精神が生まれるでしょう。ボルシェヴィズムにたいする戦争は，フランスにその昨日の敵とともに戦うという，信じられないような機会をあたえてくれることになるでしょう。そのような反ボルシェヴィズムの戦いをフランスが放置しておく権利はありません[168]。」

各団体のリーダーたちは，それぞれ，とてつもない義勇軍団への参加可能者の数字をあげた。このような参加者の数字のエスカレートにいらだったフォサーティは，フランス人民党は他の団体すべての合計と同じだけの数の義勇兵を送り出すことができると豪語した。アベッツはこれらの数字を真に受け，義勇兵の数は8万人と予想されるとベルリンのドイツ政府に知らせたが，もちろん，その数字は大幅に割り引かなければならなかった。

けれども，占領地区だけでなく自由地区でも，いたるところで志願兵募集事務所が開設され，フランス人民党南部地区のフランス義勇軍団（LVF）事務局長に任命されたシモン・サビアーニは，マルセイユにおける募集活動を指揮した。しかし，多数の——1941年7月8日から20日までのあいだに13を下らぬ——募集事務所がテロによる襲撃の対象となり，警察が日夜募集事務所を警備したけれども，テロ行為やガラスの破壊は定期的に繰り返された。フランス国民の大多数，とりわけ青年たちは，実際には，ドイツのためにロシアに死ににいくという考えには全面的に反感を抱いていた。義勇軍団の志願兵募集にたいしてフランス国民がこのように強い反感を抱いたのは，かれらがドイツ軍とともに戦うという考えを拒否したからであり，また，盛んな宣伝活動にもかかわらず，対独協力派の諸組織が世論によって信用できないとみなされていたからであったろう[169]。

では，実際には，フランス義勇軍団（LVF）には，どれほどの数の志願者があったのか。義勇軍団への参加を表明した各団体の指導者も，新聞も，そしてドイツ大使アベッツも，数週間

---

166) *Archives Nationales*, W Ⅲ 110, Rapport de la Police Judiciaire sur la LVF, 13 avril 1945; J. Delarue, *op.cit.*, p.155; J.-P. Brunet, *op.cit.*, p.364; K. Bene, *op.cit.*, p.59.

167) フランシストのビュキャールは欠席した。かれの党が弱体であるという理由からであったが，アラン・ドニエルによれば，事実は，本来，かれの党の支配下に置かれるべきフランス義勇軍団（LVF）が，逆に，かれの党にとって恐ろしい道具になることを自覚したからであった。Alain Deniel, *Buccard et le Francisme*, Picollec éd., Paris, 1979, p.189.

168) J. Doriot, *Réalités, op. cit.*, pp.117-119.

169) P. Giolitto, *op. cit.*, p.48. もっとも，当時，対独協力派内で激しい対立があったので，募集事務所の襲撃者のなかには，軍事的対独協力に反対するフランス人だけではなく，反対派の対独協力者たちもいたかもしれない。H. Amouroux, *op. cit.*, Ⅱ, pp.193-194.

のうちに，志願者が数万人になることを期待していた。ドロンクルの革命的社会運動（MSR）は，義勇軍団に5万人の兵士を提供できると申し出ていたが，しかし，やっと500人しか集めることができなかった[170]。新聞は，1941年夏の終わりには，占領地区と非占領地区とを合わせて，8,000人の志願者があったと発表した。しかし，その数字は正確ではなく，実際の志願者数はもっとすくなく，全体で，2,500人から3,000人を越えなかったようである[171]。

ディーター・ヴォルフによれば，1943年6月，ドイツ大使アベッツは，1941年7月から1943年5月までに義勇軍団に応募した志願者の数は1万788人であり，そのうち採用されたのは6,429人だったと報告している[172]。また，ジャン・ポール・ブリュネによれば，フランス義勇軍団の兵員数は，動員されなかったメンバーを含めても，3,650人を越えなかったようである。それでも，なお，8,000ないし9,000人の候補者が志願していたが，かれらのうちの若干数はまったくの社会的，肉体的な落ちこぼれ分子であった[173]。いずれにしても，ドイツ軍の課した徴募条件は厳しく，その医学的検査はひじょうに厳格であり，志願者のうちきわめて高い比率の不適格者が――とくに歯並びが悪いなどという理由で――ふるい落とされた[174]。

義勇軍団への参加者のなかには理想主義，政治的情熱，共産主義にたいする憎悪に動かされて志願したものもあったが，しかし，失業者があふれ，経済的困難の厳しかったこの時代，実際には，その大多数は給料に引かれて志願したのであった。志願兵の給与はけっして低くはなく，平均給料は兵士は月額2,300フラン（既婚者は家族手当を含めて3,000フラン），下士官は5,000フラン，士官は1万フラン（中尉7,000フラン，大佐1万9,000フラン）に決められていた。それに，金銭の誘惑は詐欺行為を誘い，「志願兵」のなかには，偽名で契約に署名し，参加手当を受け取ったあと姿を消し，その後，すこし経ってから，別の名前でふたたびあらわれるものがあった。この結果，フランス義勇軍団の志願兵のなかには，山師やアウトサイダーや社会的不適応者だけでなく，前科者もいて，それらの数は（誇張されているとおもわれるが）志願兵たちの70パーセントを占めていたという指摘（フェルナン・ド・ブリノン）もあった[175]。

志願兵の募集を促進するために，とりわけ南部地区では，フランス義勇軍団（LVF）の創立者たちは，ヴィシー政府の精神的，財政的支援を求めた。8月10日には，デアが『ウーヴル』紙上で公然と政府の援助金の支給を要請している[176]。

フランス義勇軍団（LVF）にたいして，ヴィシー政府はどのような態度をとったか。1941年8月4日付で書かれたダルランの覚書きによれば，かれは，モントワール会談から始まった対独協力政策を続行するという方針を表明

---

170) *Service historique de la défence, Vincennes*, 2P14, Rapport du lieutenant Ourdan, p.4; K. Bene, *op. cit*., p.61.

171) *Archives Nationales*, F 60 235, Etude sur la LVF, p.13; P. Bourget, *op. cit*., I, p.308.

172) D. Wolf, *op.cit*., p. 352, 平瀬・吉田訳, p.349.

173) J.-P. Brunet, *op.cit*., p.365.

174) アベッツは，「新兵たちは，平和時にはとうてい考えられないような，きわめて入念な仕方で検査され，志願者の大部分は失望し，あきらめて帰らざるをえなかった」と不満をのべている。Cit. par Philippe Masson, La LVF nach Mascou, *Historia*, hors- série no. 40 consacré à la Milice et la collaboration en uniforme, 1975, p.140; Antoine Plait, La LVF (1941-1944): une collaboration militaire vouée à l'échec, *Revue historique des armées*, no. 207, juin 1997, p.48.

175) V. Barthélemy, *op.cit*., pp.241-242; J. Delarue, *op.cit*., pp.163, 176-177, 191; H. Amouroux, *op. cit*., Ⅱ, pp.210-211; Eric Labat, *Les places étaient chères*, La Table Ronde, Paris, 1969, pp.27-28; Fernand de Brinon, *Mémoires*, LLC, 1947, p.76; Pascal Ory, *Les collaborateurs*, Editions du Seuil, Paris, 1976, p.238; K. Bene, *op.cit*., pp.58-61; *Archives Nationales*, 3W212, Ⅲ 2A2 (dossier Laval), note sur la LVF, W Ⅲ 110, sous-dossier 13, pièce 4, rapport de l'inspecteur Valentini de 20 octobre 1944.

176) *L'Œuvre*, 10 août 1941, cit. par J. Delarue, *op.cit*., p.164 et aussi par J.-P. Brunet, *op.cit*., p.366.

し，フランス政府は「ドイツ帝国が進める反ボルシェヴィズムの戦いの歴史的価値を完全に自覚し，この自覚はドイツ帝国との協力政策においてますます強固になっている」と断言していた[177]。しかし，かれにフランス義勇軍団（LVF）にたいしていかなる態度をとるかを尋ねたフェルナン・ド・ブリノン（パリにおけるヴィシー政府代表）に答えて，ダルランは，8月21日付の手紙のなかで，パリの対独協力者たちの率先的行動の限界を強調し，かれらの行動は，政治的，教義的レヴェルにおいては「意義」があるものの，結局は，私的な性格のものにとどまらざるをえないとのべている[178]。実際には，ヴィシー政府は，ドイツ国防軍とパリの対独協力主義者たちがその支配下に置いていたフランス義勇軍団（LVF）の計画を好意的な目ではみず，内相ピュシューにいたっては，在郷軍人の統一的組織，フランス戦士団の支持を受けて，志願兵の募集を全力で阻止しようとさえしたのである。

1941年8月27日午後，フランス義勇軍団（LVF）の最初の派遣部隊の近日の出発を祝うための式典が，ヴェルサイユの兵営でおこなわれた。対独協力者の重要人物のひとりを撃ち殺すことだけを唯一の目的にして，義勇軍団への参加に応募していた，フランス社会進歩（旧フランス社会党）の元団員で21歳の青年ポール・コレット[179]が，式典が終わろうとする混乱時を利用して，ポケットから出したピストルで，ラヴァル，デアその他いくにんもの人物を撃ったのである[180]。ラヴァルとデアは重傷を負ったが，致命傷とはならなかった。デアは胃と腸に深手を負い，ラヴァルの場合は，ひとつの弾丸は右腕を貫通し，他のひとつは心臓の近くにまで達していたが，ピストルの口径（6ミリ35）が小さかったおかげで命拾いした。2人はヴェルサイユの民間病院に運び込まれ，そこで，ドイツ大使の要請によって，ドイツ軍の有能な外科医がかれらの治療に当たった[181]。

コレットに共犯者はなく，レジスタンス運動にも属さず，まったくの単独犯であったが，ラヴァルとデアは，対独協力派の指導者たちを対立させていた嫉妬や権力争いから，ドロンクルがその手先にピストルを持たせて狙撃させたのだと信じ込んだ[182]。国家人民連合は，指導者（デアとドロンクル）間の対立のため，まもなく分裂した[183]。ドリオは疑われることなく，2人の健康回復を願って感謝された。

1941年9月3日，ドリオはかれの側近たちに別れを告げた。ヴィクトル・バルテレミーによれば，ドリオの顔は喜びで輝やくばかりであった。ドリオにとっては3度目の戦争であり，バルテレミーは，戦場に向かおうとするこの元反軍国主義者の「軍人の身分にたいする意外な愛」を知って，「共産党青年部の指導者であったとき，軍国主義に反対するきわめて厳しいたたかいに身をゆだねていたこの男」の姿をいまさらのように想い起こし，「この男は生まれつきの兵士である」と語っている。しかし，ドリオは，だれにも見送らせず，ひそかに出発することを望み，フランス人民党の党員たちが計画を温めていた，かれへの共感を誇示する見

177) Cit. par J. Delarue, *ibid*., p.162.

178) *Archives Nationales*, W Ⅲ 110, sous- dossier 13, pièce 45, Lettre de Darlan en date 21 août 1941.

179) *Bundesarchiv- Militärarchiv,* Freiburg, RS 3-33-33, p.6; Ph. Aziz, *op.cit*., Ⅱ, pp.202-203; J.-P. Brunet, *op.cit*., p.367; K. Bene, *op.cit*., p.65.

180) Saint- Loup (Marc Augier), *Les Volontaires*, Presses de la Cité, Paris, 1963, p.27.

181) B. Lambauer, *op.cit*., p.410.

182) Saint- Paulien, *op.cit*., p.245; H. Amouroux, *op.cit*., Ⅱ, pp.216-220; Ph. Burrin, *op.cit*., p.429; J.-P. Brunet, *op.cit*., p.367.

183) *Journal de Marcel Deat*, 24, 29 juillet, 26 août 1941, 17 mars 1942 et passim; J. Delarue, *op.cit*., pp.166, 173-175. コレットは死刑の宣告を受けたが，ラヴァルとデアのとりなしもあって，ペタンによって恩赦をあたえられた。1943年にはドイツの強制収容所に収容されたが，フランス解放後，幸運にも，そこから生還することができ，1984年には，レジオンドヌール勲章騎士章をあたえられた。

送りのデモをやめさせた[184]。

出発当日の 9 月 4 日の夜明けには，あたりの空気はそれほど熱狂的ではなく，のちに，1943 年 8 月 8 日の冬季競輪場での演説のなかで，ドリオはこの日のことをつぎように回想している。「わたしは，9 月の陰うつな朝の，最初のヴェルサイユからの出発をいまでも思い出します。われわれは，広範な敵意に囲まれていました。われわれは，大胆にも，全ヨーロッパの戦士〔ママ〕の制服を着用していて，ドイツとの融和の態度をはっきりと示していました。だれも，フランス国旗をナポレオンの軍隊がそれを掲げたと同じ場所にひるがえすつもりは，まったくなかったのです。われわれは裏切り者でした[185]。」「全ヨーロッパの戦士の制服」とは，「いまやヨーロッパの盟主となったドイツの軍服」のことであったろうが，そうだとすれば，このドリオの記憶はまちがっていた。実際には，このとき，かれとその仲間たちは平服を着ていたのである[186]。出発の日のフランス義勇軍団（LVF）の隊列のなかにいた新聞記者のアルフレッド・カトンは，つぎのように書いていて，このドリオの証言の「悲劇的な」調子を裏付けている。「われわれが少々徒刑囚のような様子をしていたのは，事実である。ドリオは，背の高い人びとがみなするように，すこし猫背になり，大きな手の先に小さなスーツケースをもって，愛国心に燃えた戦士たちの屈辱的な群れのなかを歩いていた[187]。」

フランス義勇軍団（LVF）の結成にあたって署名した対独協力組織の指導者たちのうち，このとき，みずから義勇軍団に加わり，前線に出発したのは，ドリオだけであった（ドリオ以外では，この翌年の 1942 年に，クレマンティが義勇軍団の軍事作戦に参加した）。このように，ドリオを，他の対独協力主義の指導者たちのようにフランスにとどまらせないで，自分自身も，危険を冒して，義勇軍団とともに前線に向かわせた動機は，いったい，なんであったのだろうか。義勇軍団をフランス人民党の強力な民兵に変えることによって，フランスの対独協力主義勢力の異論の余地ない指導者になろうという魂胆からだったのであろうか。

ドリオは，平服に 1939 − 1940 年の戦争のときの階級章，主任軍曹の階級章をつけて出発した。かれは 10 月初めに中尉に昇進することになっていた[188]が，かれの愚直さはかれの仲間たちの心をつかんだ。5 日間続いた東部戦線への旅行中，「かれは，家畜運搬用貨車のなかで，固い床のうえに，われわれとともに眠った。われわれより多くの毛布をもたず，われわれと同じ食事をとった」と義勇軍団のひとりの若い兵士が語っている。ドリオは，中尉に昇進しても，かれの部下たちと親しくし，人手のないときには，よく調理場を手伝い，かれの手料理「ドリオ風ローストチキン」は，兵士たちのあいだで有名になった[189]。また，ドリオが家族のことをいつも気づかっていたのは，すべての兵士と同様であった[190]。

---

184) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapports des 31 août et 3 octobre 1941; V. Barthélemy, *op.cit.*, p. 246.

185) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 340, Discours de Doriot au Vel'd'Hiv', le 8 août 1943.

186) J.-P. Brunet, *op.cit.*, p. 368.

187) Cit. par H. Amouroux, *op.cit.*, I, p. 285 et aussi par J.-P. Brunet, *op.cit.*, p. 368.

188) ドリオの中尉への昇進は，1941 年 10 月 6 日，パリで認められた。*Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, pièce du 6 octobre 1941.

189) H. Amouroux, *op.cit.*, I, p. 247; J.-P. Brunet, *op.cit.*, p. 368.

190) ドリオの留守家族の面倒をみていたのは，ジャン・ル・カンであった。ル・カンは 1938 年初めにドリオと仲たがいしていたが，元フランス人民党幹部で 1939 年初めに党を去ったジャン・フォントノワが，1940 年に，かれの新聞の経営権を奪い取ろうとしたとき，ドリオがドイツ占領軍当局に口をきいて，それを阻止してくれて以来，ドリオに限りない感謝の念を抱くようになった。

ル・カンはロリアン，サン・ナゼール，そしてトゥーロンにおけるドイツ海軍のための造船所や要塞をつくる公共工事を請け負い，戦争中のフランス人民党への大口献金者のひとりとなった。かれとドリオとのあいだで交わされた書簡が示しているように，ドリオは，東部戦線にいるあいだ，ル・カンに

フランス義勇軍団（LVF）は，ポーランドのクラクフの東150キロメートルに位置するデンバのキャンプで訓練をおこなった。フランスの兵士は松林のなかの快適ないくつかのバラックに入居させられたが，しかし，酒保，売店，映画館などの特別施設に立ち入るのを禁止されて，不満を募らせた[191]。

もうひとつ兵士たちをひどく落胆させたのは，かれら志願兵がドイツ軍の制服を着用しなければならないということであった。志願兵たちは，キャンプに着くまで，かれらがドイツ軍の制服を着なければならないことを知らなかった。義勇軍団に参加した各団体の指導者たちは，募集キャンペーンのあいだ，志願兵はフランス軍の制服を着て戦うと発表していた。また，フランス義勇軍団（LVF）の規約も，制服はフランス軍の制服であり，義勇軍団の兵士はフランスの国旗の下で戦うと定めていた。フランス軍の兵站部も，2万人分の制服と装備を用意していた。それにもかかわらず，この約束は守られなかった。フランス軍の制服は使用されることなく，志願兵たちはドイツ軍の制服を着なければならなかった[192]。しかも，この点については，ドイツ国防軍の要求はかたくなであった。「ドイツ軍の制服とは困ったものだ」と，デアは8月22日の日記で記している[193]。ドイツ国防軍が同意した唯一の譲歩は，左腕と鉄兜に3色の小さな盾形の記章をつけることだけであった[194]。ドイツ軍の制服着用についてドイツ国防軍が口実にした言いわけは，義勇軍団への参加は個人の資格でおこなわれたのであり，したがって，フランスの志願兵は，フランスを代表せず，ドイツ軍の兵士になったのだということであり，また，フランスはソ連にたいして宣戦布告してはいないので，ソ連と戦うためには，フランス人の志願兵はドイツ軍の制服を着るべきであり，もし義勇軍団の兵士たちがフランス軍の制服を着たままロシア兵に捕えられたならば，非正規軍兵士とみなされるであろうからということであった。

しかし，若干の義勇軍団兵士はドイツ軍の制服を着るのを拒否し，そのため，ひとりの兵士は軍法会議に引き出され，5年の懲役刑を宣告され，ポーランドの塩坑に送られたが，2週間後に恩赦をあたえられて，フランスに送り返された。他の兵士たちは断腸の思いでドイツ軍の制服着用を承諾したが，ひとりの中尉は灰緑色のドイツ軍の制服を差し出されたとき泣きくずれたという。ドリオ自身は，このとき，かれの胸のうちを明かそうとはしなかったが，ボルシェヴィキの悪魔と戦うには，このような犠牲もやむをえないと考えていたのかもしれない[195]。

訓練を終え，ドイツ軍の兵器の使用法とドイツ風の行動の仕方を学んだのち，フランス義勇軍団（LVF）の兵士たちは，独立集団ではなく，ドイツ国防軍第638歩兵連隊に属し，ヒトラー

宛てて，政治，財務あるいは個人的問題について語った手紙を規則的に差し出していて，フランス人民党党首にとって，ル・カンは全面的に信用できる通信員の役割を演じていたようであった。ドリオはル・カンに彼の家族の問題を包み隠さず語り，ときにはかれの情事も打ち明けた。東部戦線から送った手紙のなかで，ドリオはかれの妻マドレーヌのことを気づかい，あいかわらずサン・ドニ，ジャノー街1番地に住んでいるマドレーヌがパリ15区ショメル街にあるアパート——ドリオ夫婦が購入したのだが，それを貸した借家人が出るのを渋っていたアパート——に転居するのを手助けしてくれるよう，しきりにル・カンに頼んでいる。*Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Le Can.

[191] J. Delarue, *op.cit*., p.180.

[192] J. Delarue, *ibid*., p.165.

[193] *Journal de Marcel Déat*, 22 août 1941.

[194] *Service historique de la défence, Vincennes*, 2P14, Rapport du lieutenant Ourdan, p.2; K. Bene, *op. cit*., p.60.

[195] その後，1942年5月15日のサン・ドニ市立劇場での演説のなかで，ドリオはなぜかれがドイツ軍の制服を着用したのか説明している。*Archives de la prefécture de police de Paris*, B/a 339, rapport du 16 mai 1942; *Archives Nationales*, F^7 15300, dossier Jean Bassompière; *Archives Nationales*, F60235, Etude sur la LVF, p.26; Saint- Loup (Marc Augier), *op. cit*., p.33 et passim; H. Amouroux, *op. cit*., Ⅱ, pp.227-229.

に宣誓しなければならなかった。フランス解放後の裁判で申し立てられた屁理屈によれば，それはドイツの国家元首ヒトラーへの宣誓ではなくて，反ボルシェヴィズムの戦いに参加した軍隊の――そのとき，たまたまヒトラーであった――総司令官への宣誓であった[196]。ヒトラーの宣誓に頑固に抵抗したものは，営倉に送られ，そのために死者も出たほどであった[197]。ヒトラーへの宣誓はフランス義勇軍団（LVF）の志願兵を「正真正銘の」ドイツ軍の兵士にするものであり，国民としてのアイデンティと価値観の完全な喪失を示すものであった。完全にドイツ化されて「祖国を失った」義勇軍団の兵士たちは，フランスでの休暇中もくつろぐことができず，人びとの敵意の的になったり，近親者の無理解にさらされたりして，早くかれらの部隊に帰りたいと告白するものもいた[198]。

当初，フランス義勇軍団（LVF）内では，ドリオのフランス人民党とドロンクルの革命的社会運動（MSR）との対立が目立った。ヴェルサイユの兵舎では，ドリオは食堂で『人民の叫び』紙を無料で配布し，他のすべての新聞を排除した。デンバの訓練キャンプでは，かれは各部隊内にフランス人民党の細胞を組織し，義勇軍団の兵士たちの多くが明確な政党色をもたなかったので，ドリオは，実際より日付をさかのぼらせた入党カードにサインさせて，かれらを入党させ，ドイツ軍にたいしては，義勇軍団の兵士の 70 パーセントがフランス人民党の党員であると告げた[199]。義勇軍団に参加していた一士官の報告が，この点について，つぎのように主張している。「フランス人民党が義勇軍団に参加した志願兵の大きな割合を供給したことは，確かな事実である。しかしながら，志願兵の大多数が，かれらが義勇軍団にはいるまえにはいかなる政党にも属していなかった事実を見落してはならない。義勇軍団にはいったあとで，かれらは，そこで受けた影響に応じて，革命的社会運動（MSR）に加入するかフランス人民党に加入したのである[200]。」このようにして，多くの志願兵が，ポーランドの訓練キャンプで，日付をさかのぼらせた入党カードに署名して，フランス人民党に入党したのであった。

すくなくとも義勇軍団結成初期には，革命的社会運動（MSR）の影響がつよく感じられ，このように「政治化された」義勇軍団内では，当初，緊張が激しかった。第 638 連隊は同様な組織の 2 つの歩兵大隊に分けられていたが，第 1 大隊ではフランス人民党が支配的であったのにたいして，第 2 大隊では革命的社会運動が支配的であり，「ドリオ部屋」と「ドロンクル部屋」がつくられ，両者のあいだでは，口げんかがしばしば乱闘に発展した。しかし，まもなく革命的社会運動の分裂とともに，義勇軍団はほとんどフランス人民党の民兵組織のようになっていった[201]。

フランス義勇軍団（LVF）は，第 1 大隊の最初の部隊が 1941 年 10 月 28 日に，第 2 大隊の最初の部隊はその 2 日後に，デンバの訓練キャンプを出発して前線に向かった[202]。義勇軍団の

---

196) *Archives Nationales*, F^{7} 15300, Procès-verbal de l'interrogatoire de Bassompierre, 2 décembre 1946. 裁判でのジャン・バソンピエール（フランス義勇軍団 LVF の歩兵隊長）の証人尋問。H. Amouroux, *op. cit.*, Ⅱ, pp. 229-231; J.-P. Brunet, *op.cit.*, p. 370; K. Bene, *op.cit.*, p. 80.

197) J. Delarue, *op.cit.*, pp. 179, 182.

198) *Service historique de la défence, Vincennes*, 2P14, Légion tricolore, LVF, rapport du 24 juin 1943 du commandant Simoni, p. 4; K. Bene, *op. cit.*, pp. 79-80.

199) *Archives Nationales*, 3W101, rapport du 20 octobre 1944.

200) *Service historique de la défence, Vincennes*, 2P14, Légion tricolore, LVF, rapport du lieutenant Ourdan, p. 5; K. Bene, *op. cit.*, p. 64.

201) *Archives Nationales*, W Ⅲ 110, rapport du général Lavigne- Delville, inspecteur général de la LVF à Benoist-Méchin, 18 septembre 1942; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, notes et rapports du 2 août, 1er décembre 1941, 13 et 18 janvier 1942.

202) 最後の部隊は，11 月 1 日にキャンプを出立した。*Bundesarchiv- Militärarchiv,* Freiburg, RH 53-23/49, Le journal de guerre du cadre d'instruction de la Légion française (24 août 1941-31 mars 1942), p. 77; K. Bene,

輜重隊も，スモレンスク経由でモスクワに向かって出発した。訓練がおこなわれたのは7週間足らずであり，外国の装備と兵器を身につけた異質な集団の兵士たちの部隊にとっては，きわめて不十分な期間でしかなかった。

出発前，部隊を指揮していたロジェ・ラボンヌ大佐は，ペタン元帥に忠誠を誓うメッセージを送った。11月5日，ペタンは手紙でこれに返答し，その内容が公表された。ペタンは，ラボンヌ連隊長にたいして，つぎのように書いていた。「今度の戦闘の前夜に，あなたがわれわれの軍事的名誉の一部分を保持するのを忘れずにいることを知って，幸せである。今日，わが国にその固有の徳への信頼を取り戻させることほど，有益な任務はおそらくないでしょう。しかし，あなたは，さらにもっと直接的な仕方でフランスに奉仕しようとしている。ドイツが先頭に立つこの十字軍に参加することによって，あなたが世界から感謝されるのは当然です。そうすることによって，あなたはボルシェヴィキの危険をわれわれから遠ざけることに貢献されるのですから。このようにして，そしてまた，融和したひとつのヨーロッパという希望を迎え入れることによって，あなたが護ろうとしているのは，あなたの国なのです[203]。」この手紙は対独協力主義者たちを十分に満足させ，義勇軍団の兵士たちの傷心を慰めたが，逆に，対独協力に積極的ではない心からのペタン支持者を仰天させた。当時，正常な知的能力を失っていた老元帥が，フェルナン・ド・ブリノンに籠絡されて，手紙の内容を読まずに署名したことをだれも知らなかった[204]。

1941年11月1日，鉄道を使ってスモレンスクに着いた[205]フランス義勇軍団（LVF）は，その後はトラックで旅を続け，11月末には，ようやく，モスクワの西およそ60キロメートルの，ボロディーノ近くの湖畔の大きな村ジューコフに到着した。旅が長くかかったのは，地理的距離のためだけではなく，パルチザンの待ち伏せにたいする用心のためでもあった。ジューコフに着いたとき，一気に，すさまじい寒波が襲いかかり，ぬかるみの道はたちまち凍結した[206]。のちに，1942年2月21日のパリの冬季競輪場でおこなうことになる演説のなかで，ドリオは，このときの12月初めの日々のことを想い起こして，つぎのように語っている。「朝，マイナス10度を示していた寒暖計は，晩には，マイナス37度にまで下がり，翌日には，マイナス41度にまで下がりました。そのとき，兵士の顔つきはすっかり変わってしまいました。人間はその能力の一部を失ってしまい，指はかじかみ，手足の関節は硬直してしまいました。最前線では，地面は石のように固く，道具を使って堀ろうとしても堀ることができず，歩兵がその土地を占領しても，身を隠すところがありません。自動火器は使用が困難になります。戦車や物資補給車のエンジンは，運転手の操縦に反応しなくなります。食糧や弾薬の補給，病

---

op. cit., p.89. ここれたいして，ジャン・ポール・ブリュネは，フランス義勇軍団（LVF）がデンバを発った日を1941年10月31日としている。J.-P. Brunet, *op.cit.*, p.371.

203) Lettre du Maréchal Pétain au colonel Labonne, cit. par Louis Noguères, *Le véritable procès du Maréchal Pétain*, Arthème Fayard, Paris, 1955, aussi par K. Bene, *ibid.*, p.445 et par J.-P. Brunet, *ibid.*, p.371.

204) *Archives Nationales*, W Ⅲ, sous- dossier 13, pièce 44; J. Delarue, *op.cit.*, pp.164, 181-182; H. Du Moulin de Labarthète, *op.cit.*, pp.395-396; H. Amouroux, *op. cit.*, Ⅱ, pp.200-202; Herbert R. Lottman, *Pétain*, Edition du Seuil, 1984, p.400; J.-P. Brunet, *ibid.*, pp.371-372; K. Bene, *ibid.*, pp.97-98.

205) 連隊の最後の部隊がスモレンスクに到着したのは，その5日後である。*Bundesarchiv- Militärarchiv,* Freiburg, N 756/201, 638e régiment d'infanterie, Légion française (LVF), La brigade d'assaut des volontaires français de la SS, rapport sur la LVF, p.27; Charles Larfoux, *Carnet de campagne d'un agent de liaison. Russie hiver 1941-1942*, Editions du Lore, Paris, 2008, pp.15-16; K. Bene, *ibid.*, p.89. ジャン・ポール・ブリュネは，フランス義勇軍団（LVF）がスモレンスクに到着した日を1941年11月4日としている。J.-P. Brunet, *ibid.*, p.372.

206) H. Amouroux, *op. cit.*, Ⅱ, pp.237-240; K. Bene, *ibid.*, pp.89-97.

人や負傷者の撤収は危険をともないます。寒風が雪の波を舞い上げ，道や足跡を隠してしまいます。このような天候のときには，優秀な近代的な軍隊も，その技術的優越の基本的要素を失ってしまいます。」数日間で 200 人以上の兵士が凍傷にかかったため，かれらを後送しなければならず，そのうちの若干名は，手足の切断手術を受けなければならなかった。また，あまりの寒さのために精神錯乱におちいったものもいた[207]。

第 638 連隊のうち，ドリオのいた第 1 大隊は，フォン・ガブレンツ将軍の指揮するドイツ国防軍第 7 師団の予備隊に配属され，とくに雑役を担当した。第 2 大隊は，モスクワの方向に攻撃に向かう師団の部隊に統合されることになっていた。しかし，実際には，ドイツ国防軍は，フランス義勇軍団（LVF）の軍事能力をまったく軽視していたので，第 2 大隊もまた雑役に使用された。反対に，第 1 大隊は，1941 年 12 月 1 日，ジューコフの村の攻撃に参加した。危険を冒して凍結した湖を渡ろうとするラボンヌ大佐指揮下の部隊に，ロシア軍は容赦なく弾幕射撃を浴びせかけ，義勇軍団側にかなりの負傷者や死者が出た[208]。死闘は数日続き，ほとんど毎晩，ロシア軍は攻撃をしかけてきた。フランス義勇軍団（LVF）の形勢が危機的な局面におちいった日のことについて，ドリオはのちに（1942 年 2 月 1 日，パリ冬季競輪場で）つぎのように語っている。「それは，機関銃が用をなさないような，ほんとうに厳しい寒さの晩でした。ロシア軍の攻撃は，最初は手榴弾で押し戻しました。機関銃手が機関銃の部品を温め直して，ようやく，いくつかの保弾帯は射撃できるようになり，攻撃してくる敵を敗走させたとき，ようやく状況を立て直すことができました[209]。」

こうして，散々な敗北に終わったフランス義勇軍団（LVF）は，結局，1941 年 12 月 7 日，ドイツ国防軍のバイエルン連隊に引き継がれたが，死者，負傷者，後送された傷病兵をあわせて，その兵員の半数近くを失っていた（バイエルン連隊は，後に，ソ連軍の冬季大攻勢で，全滅することになる）。12 月 12 日の通達で，フォン・ガブレンツ将軍は，フランス義勇軍団（LVF）の兵士たちの英雄的行為，軍人精神を称賛し，かれらがボルシェヴィズムに反対し，新しいヨーロッパのために戦う熱意をドイツ軍兵士との戦友愛のなかで示したことに賛辞を呈した。その後，フランス義勇軍団（LVF）はスモレンスクに戻され，パルチザンとの戦いに使われ，ついで 1942 年 2 月初めには，その 2 大隊のうちのひとつはデンバのキャンプに送り戻され，他のひとつはクルジーナのキャンプに送られ，しばらく後に全面的に再編成された。以後，フランス義勇軍団（LVF）はもっぱらパルチザンとの戦いに当たることになった[210]。

その間，ドリオは第 638 連隊の参謀本部スタッフに任命され，フランスでの「任務」のために，パリに送られることになった。1941 年 12 月末にドリオが戻ってきたパリでは，かれが死んだという噂が執拗に流れていた。かれは生きていたが，パリを留守にした 4 か月のあいだに，19 キロやせていた[211]。

---

[207] Jacques Doriot, *Ce que j'ai vu en Russie soviétique*, Imprimerie spéciale du PPF, 1942, brochure de 30 pages, pp. 15-17; Saint- Loup (Marc Augier), *op. cit*., pp. 77-81; H. Amouroux, *ibid*., Ⅱ, 238; K. Bene, *ibid*., p. 103; 海原峻編『レジスタンス　ドキュメント現代史 8』平凡社，1973 年, pp. 231-232; 渡辺前掲書, pp. 155-156.

[208] J. Delarue, *op.cit*., p. 183; Saint- Loup (Marc Augier), *ibid*., p. 77; J. Doriot, *Ce que j'ai vu en Russie soviétique, ibid*., p. 25.

[209] J.-P. Brunet, *op.cit*., pp. 372-373.

[210] J. Doriot, *Ce que j'ai vu en Russie soviétique, op.cit*., pp. 24-28; J. Delarue, *op.cit*., pp. 185, 191-192; K. Bene, *op.cit*., pp. 98-116.

[211] *Journal de Marcel Déat*, 23 et 29 décembre 1941.

Le Parti populaire français sous le gouvernement de Vichy 1940-1942. 2

Yukiharu Takeoka

L'effondrement de l'armée battue à plate couture, la décomposition de la sociéte en France au début de l' été 1940 bouleversaient l'univers mental des contemporains. Devant la confusion totale du monde, la grande majorité des Français s'agrippaient au Maréchal Pétain comme à un homme providentiel, alors que de Gaulle, qui a fuit en Angleterre en rompant avec la discipline militaire et qui devait être condamné à mort en août, passait pour un simple officier très aventurier. On ne doit pas oublier ce climat historique pour comprendre pourquoi Jacques Doriot se rejoignait à Pétain et à son gouvernement en seconde moitié du juillet 1940. Cependant au lendemain de l'armistice signé le 22 juin, le parti populaire français était en complète déconfiture. C'est en renforçant son antisémitisme que la renaissance du PPF s' était assurée sous l'occupation allemande.

Doriot avait la conviction absolue que l'Allemagne gagnera la victoire finale. Pourtant à cause d'une sorte de retenue qui tenait certainement au fait que l'Allemagne avait partie liée avec l'URSS, surtout par le pacte de non- agression germano- soviétique de 1939, il évitait de souhaiter ouvertement la victoire de l'Allmagne. Mais après l'invasion faite dans l'URSS par les troupes allemandes en annulant le pacte germano- soviétique le 22 juin 1941, la collaboration de Doriot avec l'Allemagne est rapidement devenue positive et explicite.

En juillet 1941, Doriot a créé, avec les autres chefs des mouvements collaborationnistes, la Légion des volontaires français qui irait combattre le bolchevisme aux côtés de la Wehrmacht. Parmi les chefs des organisations collaborationnistes qui ont signé la constitution de la LVF, Doriot a été le seul homme qui a rejoint le départ du premier contingent des volontaires et qui est allé se battre en personne, comme combattant de la LVF, sur le front de bataille de l'Est.

Classification JEL: N44
Mots- clés: Pétain, antisémitisme, Légion des volontaires français contre le bolchevisme